

148 聖マタイの召命・若者は聖マタイではない

2026

真鍋友範



1 誤った聖マタイ解釈

ローマ・カトリック教会の美術史家ベッローリ由来の400年前の誤った聖マタイ解釈は、世界中にその誤った解釈を広げる結果に繋がっている。
何故か。

この作品で、イエスからの召命を受けた人物は、眼鏡の収税吏であるからだ。

では、その根拠を提示しよう。

髭男の親指は、何故上方に向かられているのか。ただ、誰かを指差したいのな

ら、単純に人差し指に力を得る込め、まっすぐ目的の人物を指差せば良いのだ。しかし、現状を観察すると、髭男の親指は、上方を向いている。

この事実に目を背けてはならない。

何故、親指は上方に立てられているポーズなのか。

ピストルサインで指さしているのではない。時代は17世紀初頭、まだピストルは知られていない時代なのだ。

では、何故、髭男の親指は、上方に向かい立てられているのか。

その答えは一つ。

つまり隣の眼鏡の収税吏を指差す直前に、髭男は自分自身の親指を胸に突き立て、『私ですか』と、イエスに問うていたからだ。

カラヴァッジョは、この動作を描いてはいない。親指から鑑賞者に理解される表現であると信じた。

しかし、鑑賞者は、あの薄暗いコンタレッリ礼拝堂の離れた位置から、親指の状況が全く目に入らなかったのだ。

美術史家ベッローニも同様。彼の犯した認識の誤りは、その後400年に及び、ローマ・カトリック学派の忠実な後継者たちによって伝えられ続け、現在（2026年1月）に至っている。

おそらく、現教皇がこの過ちに気づかない限り、400年間の過ちは訂正される事はないであろう。

では、この絵画上の描写を簡潔に公開しよう。

この絵画は、髭男の2段階連続質問動作と、その質問に対するイエスの3段階では連続回答動作によって示される眼鏡の収税吏の召命に明確に帰着する。

この事実を認識した鑑賞者は、カラヴァッジョの究極のリアリズム表現に、あ

らためて感動を覚えるに違いない。

この事実は、バロック絵画黎明期に、カラヴァッジョが果たした功績への我々の認識に対し、大幅な訂正を要求している。

つまり、カラヴァッジョは、リアリズムとキアロスクーロで解説されるだけの画家ではなかったのだ。い

極めて簡素ではあるが、その後の近代的動画表現への最初の足がかりを残していたのだ。

当時、ローマ在住でこの絵画を目にしたユトレヒト派の画家テル・ブルッヘンは、カラヴァッジョへのオマージュを込めて、眼鏡の老収税吏を聖マタイとする絵画を2枚も描いている。

もちろん、当時ローマ在住の画家も、イエスに呼ばれた人物とは、この眼鏡の老収税吏であった事実を知っていたのだ。

カラヴァッジョ嫌いの17世紀美術史家ベッローニの判断を疑いもせず信じ続けた後世の美術史家のミスは言うまでもないだろう。400年間事実は闇に葬られてきたのだ。

21世紀の現在でも状況は変わらない。例を挙げるなら、日本では、石鍋真澄史はローマカトリック学派の美術史家として著名だ。

氏は、近年のネット論文の中で、ヒゲ男の動作の解説として、親指と人差し指の2本の指を（平行に）自身の胸に当てて、『私ですか』と、イエスに問うている、と表現されている。

確かに親指と人差し指の2本の指で自身の胸に向ける動作は存在する。また、それを裏付ける絵画も存在する。

しかし、根本的に認識が誤っている点は、親指は水平方向ではなく、明らかに上方に突き立てられた状態である事だ。

さて、ここまででは、マタイ論争の一方の側、ローマ・カトリック学派の認識の誤りを指摘した。

聖マタイ論争のもう一方の側、ドイツ学派の主張する若者は、聖マタイに呼ばれた人物なのか。

結論から言うと、これも間違いた。

では、ドイツ学派を代表する美術史家として、宮下規久郎氏の解説する文章から、その過ちを指摘しよう。

宮下氏は、【イエスは下方を指差している】と解説される。しかし、本当にイエスが下方を指差した動作なのか。

絶対にそのような動作で指差す人はいないのだ。

通常指差すなら、人は指を真っ直ぐ伸ばす。下方を、指を曲げて指さす人などいないのだ。

だが、人差し指が第一関節で曲がるケースは、一つだけある。

それは、イエスが肩を中心とした右手の垂直回転運動させて、『向こう側の人だ』と表現した場合だ。

手首から先には力を込めない。だから手首で折れ曲がる。また、人差し指も自然に第一関節で曲がることになる。

仮にこの宮下説に従うとしよう。矛盾が生じる。

何故なら、イエスの本当の立ち位置は、カラヴァッジョによって絵画上に描かれた位置ではないからだ。

この事実を暗示しているのは、登場人物の髭男や、彼のボディガードの視線だ。カラヴァッジョは、明らかにイエスやペテロの後ろを見る姿を描いている。

この視線が暗示しているのは、イエスは、彼らの視線の先、つまり画面の右外側であると示している。

さて、その位置からイエスが緩く指を曲げ、下方を指差したのなら、そこは床なのだ。

さて、氏の別の解説文章には、『髭男は、若者を指さしているように見える』と、あったが、これは遠近法理論を無視している。

何故なら、若い頃収税氏は、髭男の隣に位置していない。斜45度前方だ。

この位置にいる人物を指さすなら、指の長さは、半分の長さに圧縮されて描かれてはいけなければならない。

しかし、カラヴァッジョの描く髭男の人差し指は、横にほぼ真っ直ぐ伸びている状態だ。

つまり、どう見ても【若者を指さしている】、という判定には同意できないのだ。

ドイツ学派説も、また、誤った《聖マタイの召命》説の拡散なのだ。

結論として、40年に渡るマタイ論争は、カラヴァッジョの描く描写内容への、古い権威ある学説を根拠に検証を怠っていたか、科学的で緻密な人間行動学的視点での検証を怠っていたのか、または、図象学的な検証の視点を欠いていたために、カラヴァッジョ絵画の真実に到達していなかったことになるのだ。